

巷説百物語

KYOGOKU  
Natsuhiko

京極夏彦



立ち読み  
専用



巷説百物語◆目録

芝

右衛門狸

◆二〇一

塩の長司

◆二八五

柳女

◆三六五

帷子社

◆四五一

小豆洗い◆七

白蔵主◆六九

舞首◆一三七





巷説百物語



巻説

白物語

ひょうせつ  
ひやくものがたり



小豆洗い

あずきあらい



やまでら こぞう  
 山寺の小僧  
 たにがわ ゆき  
 谷川に行てあづきを洗ひ居たりしを  
 どうじゆくぼうすいしゆ  
 同宿の坊主意趣ありて  
 たにがわ せと  
 谷川へつき落しけるが  
 いわ  
 岩にうたれて死したり  
 かのこぞう れいこん  
 それよりして彼小僧の靈魂  
 あづき  
 おりく出て小豆をあらひ  
 なきわら  
 泣つ笑ひつなす事になんありし

越後の国に枝折峠という難所がある。

一帯に榎の巨木が生い茂り、昼尚暗い秘境であるという。その昔、平清盛に都を追われた中納言藤原三郎房利が尾瀬へと向かうその途中、この榎の森へと迷い込み、苦心難渋した際に突如不可思議なる童子が立ち現れ、枝を折り乍ら一行を山頂まで導いたという故事がある故、枝折峠の名があるのである。

その峠より更に奥――。

篠衝く雨に煙る山深い獣径を只管進む、網代笠の僧の姿があつた。

この僧、法名を円海という。円海は草を踏み分け枝を弾いて、ただ足を進めていた。

――早く。少しでも早く――だが。

円海は立ち竦んだ。

折からの激しい雨が山間の谷川をどうどうと溢れさせている。

澄んだ清流だった筈の小川も、今は上流の泥土や砂利が混じり、最早濁流としかいいようがなかつた。

——これは渡れぬ。

険しい山道である。引き返せば山の中で夜を迎えることになる。

今更戻ることも適わぬし、ならば渡るしかない。この谷川を渡りさえすれば、寺までの道程は残り僅か——多分半日もかからないのだ。山に分け入らず、街道の峠を越えても二日、峠を迂回すれば四日はかかる道程である。この間道を行くなら一日で済むのだ。日暮れ前に川を突っ切れれば深夜には山門を潜れるであろうと、円海はそうした腹積もりで歩を進めていたのである。

躰の隅隅まで、急激に疲労感が充満する。

——失敗った。

取り分け先を急ぐ旅でもなかったのだから、出来るだけ無難な道を行くべきだったのだ。少なくとも街道沿いに来ていれば、このような抜き差しならぬ状況に陥ることはなかった。

それは判っていた。明け方から雲行きは怪しかったし、円海は今朝の今朝までそう思っていたのだ。それでも——自然に足は山に向いた。難儀な獣径ではあるが、幼い頃から慣れ親しんだ道だったからであろう。この辺りの山は円海にとって庭のようなものである。その慣れが裏目に出た。天候を読み違えたのである。

——却説。

残る手はひとつしかなかった。慥か上流には古びた丸木橋らしきものがあつた筈だ。そこまでなら日暮れ前に着ける。引き返すよりは遙かに得策である。橋を渡ってしまえば——。

——後は何とかなるだろう。

そう考えた。

円海は重い脚を懸命に振り上げて、川に沿い、上流へと進んだ。

たつぷりと水を含んだ法衣が躰に纏わり付く。網代笠にばらばらと雨が当たり、やがて笠の

目にも水が滲みだした。顔が上げられぬ。

旅装と雖も、歩き難いこと甚だしい。

ざあざあ。どうどう。

天の底を抜いたような大粒の雨である。

風が凪いでいるのが唯一の救いである。慣れた道とはいえ、これで風が強ければ命の保証は

なかっただろう。

ざあざあ。どうどう。

しょき。

——何だ。

異質な音がした。

無理に顔を上げる。目の前に男が立っていた。

しとどに濡れたその男は、見たところ円海同様の僧形である。

しかし衣は墨に染まってはならず、純白であった。胸には偈箱を提げて、坊主頭を白木綿で行者包みにしている。修験者か巡礼か、否、物乞札売りの類であろう。

男は大声で言った。

「この先はお止めなせエ——」

一本しかねえ橋も朽ちてたようで、流されちまったんでサア——と、その男は言った。

「精精雨宿りでもしなくツちゃ、お互いここで御仕舞いですぜ。このまんま、うんと下手に下った川岸に、粗末な小屋が建つておりやす。そこで夜明かしてもしねえと——否、この雨じゃア夜が明けたっていけねえやい。いづれお天道様ア拝まなきや御陀仏だ」

「小屋——か」

この辺りに小屋などあつただらうか。

円海には覚えがない。

「誰が住まうか知れぬ荒屋でさア。奴はそこに行くところだ」

「小屋——」

——そう言われれば。

小屋があつたようにも思う。

「ま、御坊のお好きになさるといい」

男は円海の返事を待たずに、泥を跳ね上げて斜面を下り来ると、円海を通り越し、確乎りとした足取りで下流へと向かった。円海は肩越しにその男の背姿を追い、それから網代笠を擡げて橋のあるだろう、或は橋のあつただろう方角に顔を向けた。

目を凝らしてみたが、煙霧に霞んで何も見えなかつた。

夕暮れの雨空は益々ますます昏い。

夜が緊ひび緊ひと近づいている。

雨足は弱まる気配もない。

ざあざあ。どうどう。

しよき。

——駄目だ。

男の言う通り、橋が流されてしまったのならこれ以上の行軍は命取りになる。男の助言に従った方が良いだろう。それならそれで急がねばなるまい。だが——下流に小屋など——。

——小屋などあったか。

円海は踵かかとを返して川筋を下った。男の姿はもう見えなかった。

豪えいごく足の速い男だ。いや、この雨である。早足にもなるう。

道標みちしるべを失って、視界も悪く、足許おぼつかも覚束ない。

果たしてその小屋とやらに辿たどり着けるものか。

濁流いざなのどうどうという音に誘いざなわれるように進む。

それしかあるまい。それなのに。

雨の音と、川の音が渾然こんぜんとなる。

どうどう。どうどう。どうどう。

刹那せつな。

ぬるり、と足が滑った。苔を踏んだのだ。

円海は大きく前にのめり、倒れ込むことだけは避けようと躰を返したが為に、反動で腰が引け、結局思い切り尻餅を衝いた。

——ここは。

この場所は。

大きな一枚岩。

——鬼の——洗濯板か。

そう呼ばれている場所だった。

円海は脱力して、暫く座り込んだ。

何だか——どうでも良くなってしまうた。

雨を媒介として円海は山や大気と一体化する。

その時世界は円海の内側に取り込まれ、ざあざあという雨音は、円海の躰を流れる血潮の律動と同調して、小刻みに断絶した。

ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。

——ここは。この場所は。

南無妙法蓮華経。南無妙法蓮華経。

凡ては——凡てはここから。

そんなつもりでは。

ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

ぬ。ぬ。ぬ。

ぬ。ぬ。

ぬ。

円海はふいに我に帰った。

どれくらい自失していたのだろうか。

一層激しさを増した雨糸が網代笠沿いに幕を張り、円海を外界から完全に遮蔽している。

——いけない。

恐怖心に駆られ、円海は立ち上がる。そして、朦朧とした過去への時を遡るかの如くに川筋を下った。何も見えないにも拘らず躰は自ら道を選び、円海は半ば滑るように、落ちるように、予め決められてでもいたかのように——そこに向かった。

果たして小屋などあったらどうか——そうした疑念などは疾うに掻き消えている。その小屋は円海の観念の中に慥かに建っている。そして天を抜けて滴り落ちる無数の水滴によって既に山の風景と融合してしまっている円海にとって、外界と内部の差異はなかった。だから円海は無心でそこに向かっている。

この先に。

——小屋だ。

小屋はそこにあつた。

川と山とに挟まれて、朽ちかけた粗末な小屋が身を縮めるようにして建っていた。雨足に耐えるのが精一杯という、文字通りの掘つ建て小屋である。

円海は迷わず戸口に駆け寄り、打ち当たるようにして戸を開けて躰を翻し、力任せに戸を閉めた。

これで。

——何だ。

ゆるりと振り向く。

予想外の——多くの視線に、円海は一瞬怯んだ。

囲炉裏を巡って十人程の男女が車座になって座っていた。

上座には先程の白装束の男が座っている。男は円海を見つめたまま、にんまりと微笑んだ。

「おいでなさいやしたね——」

男はそう言ってもう一度笑った。

行者包みを取り払った頭には、すっかり濡れた髪の毛が、雫を漉して張りついている。鬚を結える程の長さではない。剃髪したそれが伸びたものであるう。

「——そのまんまじゃあ幾ら修行を積まれた御坊でも悪気寒気が入りやす。法衣の裾をお絞りになつて、こちらへおいでなせえ——」

男は愛想良く手招きをして、一同を見渡した。

近在の百姓らしき者が数名。担ぎの物売りが数名。

壁際には垢抜けた、色の白い細面の女が、撓垂れるように横座りになっている。

派手な江戸紫の着物に草色の半纏が小屋の様子にまるで似合っていない。旅支度とも思えぬ出で立ちである。

女は切れ長の眼を細めて笑いかけた。

その横に縮こまって居るのは多分商人である。齢の頃なら五十か六十か、こざっぱりした身態から察するに、それなりに名の通ったお店の主といったところだろうか。思うに江戸者である。

その隣には得体の知れない若い男が正座している。旅装束ではあるが、泰然とした物腰は百姓町人とも思えず、職人の類でもないだろう。勿論武士ではない。円海の姿を見てもまるで動じる様子もなく、ただ飄飄として、矢立の蓋をばちばちと開閉している。

一番奥には檻褸を纏い背を丸めた老人の姿が覗いていた。

多分、彼がこの小屋の主だ。何故か円海はそう確信した。

老いさらばえた、干からびたような、瘦せた小さな男だ。

円海は——目を逸らす。

この老人は見たくない。

表情が解らぬ。きつと言葉も通じぬ。ならば異人である。

そんな気がしたからだ。

「——遠慮することアねえ」

白装束の男は見透かすような強い視線で円海を見据えて、それでいて尚、随分と柔らかい口調でそう言った。

円海が何か答えようとするのを遮るように男は続けた。

「なアに、この小屋アこちらの伍兵エさんの縁続きの者が、その昔住んでいたところだそうだから、遠慮は無用で。なア伍兵エさん」

男は老人に鼻を向けた。老人はへえ、と風が抜けるような乾いた声で返事をし、無表情に頷いた。

——主ではないのか。

円海にはそうは思えない。伍兵エと呼ばれた老人は、この小屋に馴染んでいる。この小屋を完成させる為に、この老人は不可欠だ。老人はまるで漆喰の染みの如くに小屋の中の風景に定着している。

額から伝った水滴が眼に入り、円海は幾度も瞬きをした。

白装束はさらに続けた。

「どうしやした御坊。いくら濡れてるからって水臭エや。この連中になら気兼ねア要りやせんぜ。この時刻、こんなどころに居るンでやすから、いずれ表街道を歩けねエ半端者どもにやあ違エねえんで——」

「オイ御行殿——」

若い男が手を翳す。

「そちらのお坊様は、私達のような下賤げせんの者との同席を望まれぬのかもしれないぞ。もしや修行の最中であらせられるのかもしれない。ならばそう無理を言うてはいかん。のう、お坊様」

「否、左様な——」

しよき。

——駄目だ。

ご厄介やつかいに——円海は短くそう言つて、網代笠を取つた。

「ご厄介やつかいになり申す」

言うなり円海は土間に膝をついた。

落ち着くまでに、半刻はんときはかかった。

悪天は夜半に至つても鎮まる気配はなかった。小屋の中は只管ひたすらに昏く、ただ囲炉裏の炭の爆ぜる音だけが思い出したように幾度か響いて、円海の鼓膜を震わせた。幽かすかな炭火程度では濡衣が乾く訳もなく、衣はべつたりと全身みに貼りついている。

その不快感たるや喩たとえようがない。

座まが和んだのはそれから更に半刻後のことである。

円海もいつのまにか車座の輪の中に雑まじっている。

こうした夜は長いもの、ここはひとつ江戸で流行はやりの百物語と洒落しゃれてみやせんか——と最初に言つたのは、多分御行だつたらう。異を称える者は誰もいなかった。

慥かに何か無駄話でもせねば堪えられぬ雰囲気ではあつたのだ——。

2

アタシはねエ、こんな根なし宿なしの商売で御座居ますからね。そりゃアあちこち廻れば、色色と怖い話妙な噂も聞きますわねエ。

え？ アタシの商売？

見ての通りの傀儡師、山猫廻しで御座居ますよウ。

山猫っていえばねエ。そうだ、山猫ってのは人様を化かすんで御座居ますよ。知っておいでかエ？ そう、馳、貉に狐に狸、人間様を誑かす獣は多ウ御座居ますがね。山猫も化かしますのサ。

嘘だろって？ 嘘なもんか。飼ひ猫だつて化けるンだ。だつて、猫は飼ひ始めに年期を言い渡さなきゃア仇を為すとか、齡とつてから化けるとか申しましよう？ そう、猫又つて言うんですか。

アタシもね、そう、江戸に居りました時分にね。新内のお師匠さんの真似をして、小さい三毛を飼ひましたのサ。まだ生まれて間もない奴で、びいびい鼠みたいに鳴いてねエ。アタシだつてこんなもんが化けるもんか——とは思ひましたサ。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。